

団体営小規模排水対策特別事業（伊那市手良蟹沢南地区）

# 蟹沢桜林・入林・ワランベ遺跡緊急発掘調査報告書

伊那市教育委員会

伊那市手良土地改良事務所

## 序

伊那市手良蟹沢地区は昭和六十年単年度に小規模排水特別対策事業を行った。蟹沢地帯の蟹沢桜林・入林・ワランベ遺跡の緊急発掘調査は、この事業の一環として、手良土地改良事務所の委託により伊那市教育委員会が発掘調査団を設けて、昭和六十年単年度事業として実施したものである。

この地帯は北側に伊那山脈の北限、鉢伏山麓の峰々の連なりを仰ぎ見、西側の眼下に、鉢伏山を源として、南へ流れ下たる棚沢川が龍蛇の如く見え、駒ヶ岳山麓に沈み行く西日を正面に眺望できる風光明媚な土地柄と言えよう。

今回の調査結果として、入林遺跡より初めて検出された城館跡は手良奥地の中世史解明に大きな手掛りになると思う。

この調査にあたっては、団長に友野良一先生をお願いして調査団を編成し、発掘調査を実施したわけですが、調査団の先生方の献身的な御努力と、手良地区の皆様のご協力によって、無事終了でき、まことに喜びにたえません。

ここに調査報告書を発刊するにあたって、手良土地改良事務所をはじめ、県教育委員会、調査団の諸先生、地元蟹沢地区の皆様により、改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和六十一年三月

伊那市教育委員会教育長 伊沢 一雄

## 凡例

一、今回の発掘調査は小規模排水対策特別事業に伴う、土地改良事業で、第一次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

二、この調査は小規模排水対策特別事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県伊那市手良土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成して実施した。

三、本調査は、昭和六十年単年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

四、本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美

### ◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一 飯塚政美

○土器及び石器実測図

飯塚政美

### ◎写真撮影

○発掘及び遺構・遺物

友野良一 飯塚政美

五、本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。六、遺物及び図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

## 一 発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業に伴なって昭和五十二年度には中坪の砂場遺跡、昭和五十四年度には上村の上村遺跡を緊急発掘調査致しました。前述した土地改良事業は農村総合整備事業と呼ばれています。昭和六十年度には県営園場整備事業に伴なって手良八ツ手にある堤林・鳥崎の岡遺跡が夏場に緊急発掘調査されました。同年、小規模排水対策特別事業の実施以前に手良蟹沢にある蟹沢桜林・入林・ワランベ遺跡の発掘調査を夏から秋にかけて実施した。

昭和六十年七月二十四日 手良土地改良区理事長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに、発掘準備にとりかかった。発掘調査に着手する前に伊那市教育委員会を中心にして蟹沢桜林・入林・ワランベ遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

## 二 調査の組織

### 蟹沢桜林・入林・ワランベ遺跡発掘調査会

#### 調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	北村 誠	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	山口 豊	伊那市教育委員会委員長
	村山幸義	伊那市教育委員会教育次長
	蟹沢典人	社会教育課長
	柘植 晃	課長補佐
	宮原 強	係長

調査事務局 飯塚政美 伊那市教育委員会社会教育課主任

高木いづみ

主事

#### 発掘調査団

団 長	友野良一	日本考古学協会会員
副 長	根津清志	長野県考古学会会員
	御子榮幸正	
調 査 員	福沢幸一	
	飯塚政美	日本考古学協会会員
	小池 孝	

#### 〔作業員名簿〕

田三千代 埋橋程三 後藤重美 酒井とし子 柴佐一郎 登内政光  
登内昇 網野実子 北原一喜 大久保富美子（敬称略順不同）

## 三 位 置

蟹沢桜林遺跡、入林遺跡、ワランベ遺跡は、長野県伊那市手良野口蟹沢部落に所在する。遺跡地までの道順は次の二通りが考えられる。その一つとしては、伊那市街より杖突街道を東へ五〇程行くと美篇上原に至り、上原と上大島の境界付近で杖突街道を左折して、北へ向う。左側に美篇小学校が見える。小学校のすぐ北側に三峰川右岸第二河岸段丘が東西に走っている。段丘斜面を登りつめると広大な平地が展開し、水田地帯となっている。末広を通り、杖突街道と別れて二〇程で手良中坪に至る。中坪の中央部付近に八幡宮があり、ここを右折し、さらに百〇程東へ行き、左折して、細く、曲がりくねった道路を一〇程北へ行くと手良野口蟹沢に至る。この集

落の西側に棚沢川が南流しており、棚沢川によって形成された河岸段丘と山麓扇状地面のわずかな谷間地形を利用して集落が営まれている。

もう一つの道順は伊那市街より進路を北にとり、上牧、野底、福島を通り、箕輪町境の卯ノ木集落の南側を右折し、八ツ手、下手良を通る。下手良地区は手良の中心地であり、伊那市役所手良支所、手良小学校、手良農協、手良郵便局、手良診療所、手良保育所等々の各種の公共施設が棟を並べて建っている。手良農協前、信号機のある三又路を左折して五〇〇m程行くと、野口集落の中心地に至るさらに、五〇〇m程、北東へ行くと蟹沢集落が見える。

蟹沢林道跡は蟹沢集落の北はずれに、入林道跡は蟹沢集落の東側に、ワランベ道跡は入林道跡の東側にそれぞれ位置している。

#### 四 地形・地質

蟹沢林道跡は棚沢川によって形成された河岸段丘面に、入林道跡は棚沢川の支流であるタラガ沢によって形成された山麓扇状地の扇端部に、ワランベ道跡は山麓扇状地の扇頂部にそれぞれ立地している。三遺跡とも現況は大部分、水田、畑になっている。標高は蟹沢林道跡八四五m、八六〇m、入林道跡は八二〇m、八四〇m、ワランベ道跡は八三〇m、八五〇m位をそれぞれ測定できる。

伊那谷の一般的な地形は次のようである。伊那谷は木曾山脈、赤石山脈、赤石山脈の前山である伊那山脈にはさまれている。これらの山脈の谷間を天竜川が蛇行しながら南流し、一般的に言われている縦谷状地形を形成している。天竜川の両岸には多くの支流が東流

西流し、堆積、浸食作用の反復によって、大小様々な扇状地、峡谷を形成している。伊那市近隣も大小様々な支流によって扇状地、河岸段丘の発達が顕著であり、河岸段丘は電西で五段、電東で八段を成している。

遺跡付近の微地形については、以前に清水英樹氏が記述された「浜弓場遺跡」の報告書で述べられているので、それを引用させていただく。その理由としてはこの報告書にまとめた三遺跡は浜弓場遺跡と二〇〇m位しか離れておらず、しかも同じような地形・地質を成していると思われる。「遺跡地は、伊那山脈の花崗岩を基盤となし、その上に棚沢川、竜ノ沢川、タラガ沢によって形成された扇状地で、南西に傾斜し、北東にはほとんど傾斜をもたない扇状地や丘陵地である。なお、高尾礫層の完全な露出は、東方の清水庵の崖にみられる。この礫層の上位に古期テフラ層(チヨコレイト色)が堆積し、中期テフラが降灰堆積するまでに時間的間隔があり、風化され、一部が残り、その上に中期テフラが降灰し、堆積し、新期テフラが降灰するまでに時間的間隔があり、風化され一部が残り、新期ローム層の降灰がある。遺跡地の展開する高尾段丘は、美濃の天神山を形成した時代に次ぐ古い段丘で、伊那谷の河岸段丘は、古い方から、塩礫面、高尾面(I・II)、大泉面、神子柴面(I・II)、南殿面、木下面(I・II・III)と発達しているなかの高尾面に相当する段丘面である。

遺跡地付近のテフラ層は三種類に分類され、下部から古期、中期、新期テフラ層と呼ぶ。中期テフラ層は、神子柴段丘面を形成した神

子架礫層と同層層であり、新期テフラ層と一部同時層は、南殿・木下段丘面を形成した。南殿礫層、木下礫層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲである。また高尾面を形成した高尾礫層と一部同時層となるテフラ層は、古期テフラ層である。なお、古期テフラ層中には六枚、中期テフラ層中には五枚、新期テフラ層中には二枚の浮石層が夾在している。これらの浮石の多くは、放射年代が判明している。

## 五 周辺遺跡との関連

手良地区は伊那市では東部地域の一端を担っている。この地域は天竜川の東側、いわゆる竜東地域と呼ばれ、天竜川の西側、いわゆる竜西地域と対比される。手良地区の最も大きな河である棚沢川の周辺には数多くの遺跡が存在している。手良地区で現在確認されている遺跡は五〇カ所を越えようとしており、これらの存在立地条件を考えると次のようになる。棚沢川を中心とした河岸段丘面に立地している遺跡群、山麓扇状地の扇頂と扇端に立地している遺跡群、手良における縄文早期の遺跡として浜弓場、所洞、ワランベ、松太郎塚があげられる。

浜弓場遺跡は宅地造成を行うとのことで、昭和四十七年十一月二十九日から十二月十九日にかけて伊那市教育委員会が中心となって緊急発掘調査を実施した。調査の結果、縄文早期焼石群三基、縄文中期竪穴住居址四軒、平安時代竪穴住居址二軒、中世の土壘一基であった。土器としては斜縄文、楕円押型文・山形文と楕円文の組み合わせ、田戸下層式、鶴ヶ島台系、茅山下層系、茅山上層系、花積式、関山式、黒浜式、五領ヶ台式、下小野式、井戸尻式、加曾利E

式、土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器。

縄文中期の遺跡としては所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎塚等々がみられる。狐垣地帯からは縄文中期の栗の炭化物が出土したとのことで有名である。縄文晩期の遺跡としては野口遺跡が火葬墓が発見されたことで全国的に名が知れわたっている。従って、この遺跡は葬制を研究するには欠くことのできない遺跡の一つに数えられている。

南垣外からは平安時代中ごろの灰釉陶器長頸瓶と人骨が出たと伝えられており、この地は現在は庚申塚と呼ばれ、数本の庚申塔が建立されている。庚申塚から西へ五〇〇m位行った水田地帯が古代の手良郷の中心地ではないかと推定されている福鳥遺跡である。

時代は前後するが、中坪の砂場遺跡を昭和五十二年に発掘調査を実施した。その結果、弥生後期の住居址二軒、古墳時代の住居址二軒、平安時代の住居址四軒の発見をみた。笠原堂垣外、富士塚遺跡からは古式土師器の良好なセットと竪穴住居址が発見されている。古墳としては矢塚・山伏塚がかつては存在していたが、二つとも現在は消滅してしまっている。浜弓場遺跡の南の溜池を構築する時に多量の人骨が出土したと言われている。

近世の遺跡として上村遺跡がある。昭和五十四年六月一日～六月七日にかけて緊急発掘調査を実施した。寛永通宝六枚、人骨、キセルが発見された。古銭の鋳造年代及び古銭の出北枚数からして近世の墓である。六枚の古銭とは六文銭の風習の一端をうかがい知ることができるのである。

(飯塚政美)



第1図 位置及び遺跡分布図

遺跡の名称

- ①沢山 ②矢塚 ③東松 ④小百済毛 ⑤六道原 ⑥辻西幅 ⑦菅窪  
 ⑧ヨキトギ ⑨野口畑 ⑩古八幡 ⑪近洞 ⑫野口 ⑬島崎 ⑭富士塚  
 ⑮蟹沢桜林 ⑯金山 ⑰殿治垣外 ⑱上村 ⑲下手良中 ⑳堤林 ㉑古屋敷  
 ㉒フランベ ㉓電の沢 ㉔中原 ㉕社宮地原 ㉖山の田 ㉗城山  
 ㉘入林 ㉙鳴神 ㉚石見堂 ㉛宮の平 ㉜大原 ㉝神手原 ㉞浜弓場  
 ㉟大上 ㊱山伏塚 ㊲二十平 ㊳砂場 ㊴松太郎塚 ㊵日向畑  
 ㊶狐垣外 ㊷丸山 ㊸地神原 ㊹清水沢 ㊺南垣外 ㊻笠原堂垣外  
 ㊼鳥ノ宮 ㊽向田 ㊾小萩原 ㊿郷の坪 ㊽角城 ㊽堤下  
 ㊽辻垣外 ㊽堂垣外 ㊽大百済毛 ㊽柿の木 ㊽垣外 ㊽林蔵

# 蟹沢桜林遺跡

## 一 発掘日誌

昭和六十年七月三十一日(水) 晴 本日より蟹沢桜林遺跡へ入る。部分的にグリット掘りを実施するが遺物の出土はなかった。南側に面した傾斜の強い所に遺跡地が存在しているといわれていた。山の押し出しが多く、また、現存している沢との比高差が少ないために、かつては流れた可能性が強く、山麓の押し出しが厚く覆っていた。従って、遺跡の密度は薄いものと思われる。

昭和六十年八月一日(木) 晴 前日に引き続き、グリット掘りを実施するが、遺物の出土は何もなかった。地層の状態は前日と同様であった。従って遺跡の密度は少ないものと思われる。本日もって、蟹沢桜林遺跡の分布調査を終了する。

昭和六十年十二月四日(水) 晴 蟹沢桜林遺跡の本格的な調査をしてみるが、地層の状態は夏場施行した時と同じようであったために遺構の検出はまず望めないと思われる。遺物は土器片と陶器片が各々一片づつ出土した。道具のあとかたづけをし、伊那市考古資料館へ発掘器材を運搬する。

昭和六十年十二月、昭和六十一年一月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集。

昭和六十一年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十一年三月 報告書を刊行する。

## 二 遺構

今回の調査では遺構の検出は何もなかった。その理由としては、北から南への傾斜が極めて強く、住居を構えるには地形的条件が悪すぎる。

## 三 遺物 (図版4-5)

今回の調査で遺物が二点出土した。図版4は縄文中期の土器片と思われる。文様は外面が全て剝落してしまっているので不明である。黒茶褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は普通である。図版5は近世陶器の茶碗である。器の底面中央部付近に藍色の呉須を用いて文様を付けてある。文様は小さな円形状の文をほぼ等間隔に五点描き出している。高台の近くに呉須を一本同心円状に施してある。

## 四 まとめ

今回の発掘調査の直接的動機は小規模排水特別対策事業地内に含まれるとのことで、本遺跡発掘調査を実施した。この遺跡の存在している地域は南向きの極めて急傾斜を呈する地形であり、しかも、かつて土地改良を実施したような水田の形態となっておった。以上の事柄を総合してみるに全面的に調査を実施してみても、遺跡のある可能性は極めて少ないと思われる。

(飯塚政美)





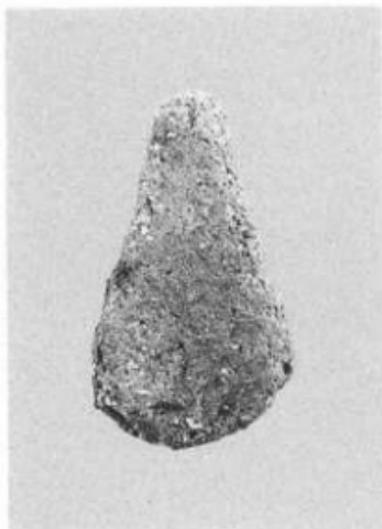
図版1 遺跡地を南側より眺む



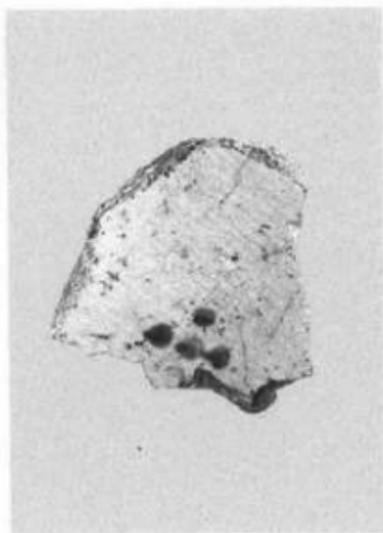
図版2 発掘調査を終了したグリット



图版3 免 掘 風 景



图版4 出土石器



图版5 出土陶器

# 入林遺跡

## 一 発掘日誌

昭和六十年十一月十五日（金） 晴時々曇 入林と言われている遺跡付近へ発掘器材を運搬し、テントを南北に長く二張り建てる。現況が水田であったために、何んの抵抗もなく、安易にテントが建てられた。運搬及びテント建ては午後三時頃終了する。それ以後は発掘予定地（現況桑畑）の桑の枝をかたづけける。

昭和六十年十一月十九日（火） 晴 十五日に桑の枝をかたづけた桑畑を桑のうね幅に従って掘っていく。できるだけ試掘溝を多く入れるが遺物は全く出土しなかった。耕土は浅く、二十cm位でローム層に達した。

昭和六十年十一月二十日（水） 晴 前日、掘った桑畑をはさんで南側の桑畑へグリットを入れて、掘ってみる。道をはさんだ最も北側に東から西へ溝状の遺構が発見された。途中から、この溝より南へ溝が存在し、溝が鎌の手状に曲がっているために館跡の可能性が強くなった。内耳土器片が若干出土した。

昭和六十年十一月二十一日（木） 晴 溝状遺構の拡張をする。内耳土器片が少量出土した。

昭和六十年十一月二十二日（金） 晴 溝状遺構は最終的には堀の形態を成していた。堀底よりかなり大きな破片の内耳土器片が出

土した。堀底は南側へ行くに従ってやや傾斜をしている。

昭和六十年十一月二十五日（月） 曇時々晴 土地改良実施予定用地内の堀は大致掘り上げを終了する。堀の中央部付近の東側に大きな凹みが発見され、これを第一号土壙とする。

昭和六十年十一月二十八日（木） 曇のち雨 午後は雨足が激しくなってきたので、作業は午前中で終了する。堀の北側の流し堀用に利用した堀の引水をした箇所を調査したところ、引水用の堀は東へ東へと延びていた。第一号土壙の掘り下げを進めていく。堀の中心から古瀬戸灰釉菊花文風が出土し、本館跡の年代がある程度判明してきた。第一号土壙より縄文中期の打製石斧が二点出土した。

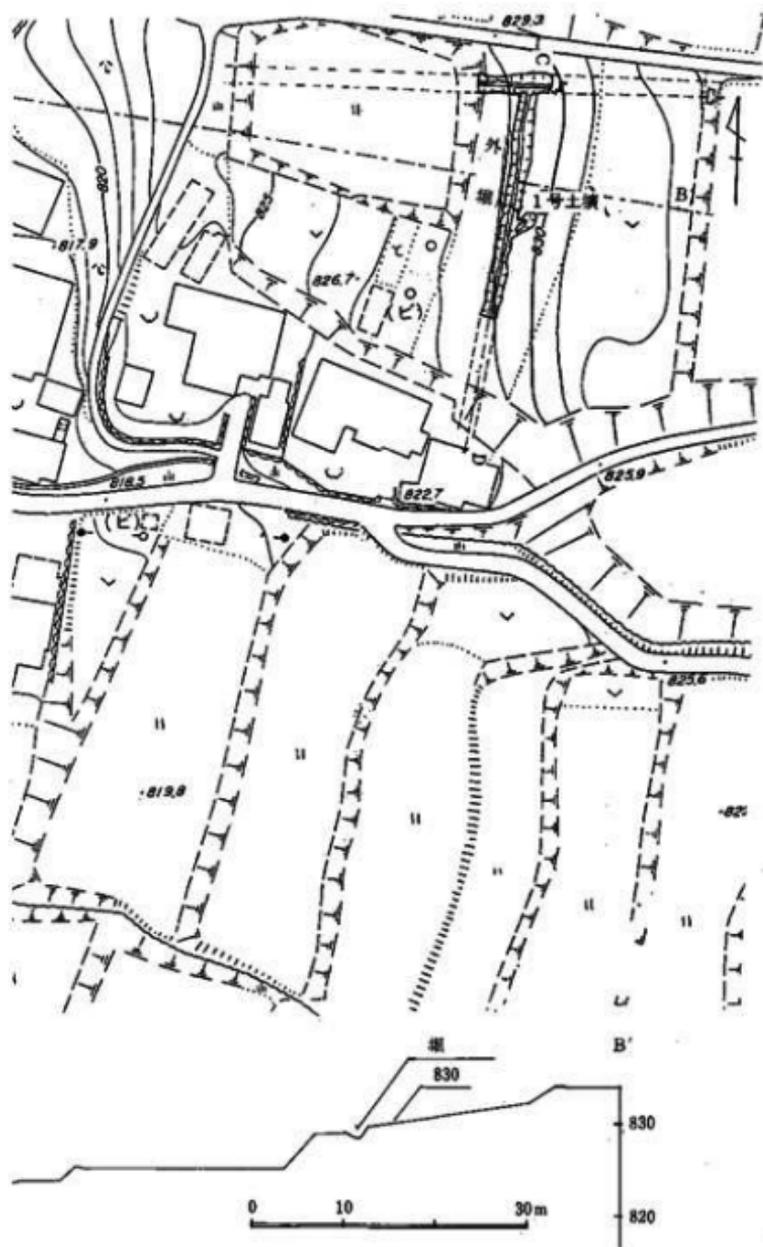
昭和六十年十一月三十日（土） 晴 入林遺跡の堀の清掘をし、写真撮影をする。午後、堀の平面実測とセクションの実測をする。

昭和六十年十二月三日（火） 晴 入林遺跡の堀の実測と断面実測、地形図、全測図の作製。

昭和六十年十二月一日昭和六十一年一月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集。

昭和六十一年二月 報告書を印刷所へ送る。  
昭和六十一年三月 報告書を刊行する。

## 二 遺構（第1-4図、図版2-3）





第1図 地形及び城跡跡実測図

(1) 城館跡 (第1-3図 図版2-13)

本城館跡の存在は地域住民には全く知られておらず、また、伝承すら残っていない。従って、今回の検出は新発見となった次第である。付近一帯にはかつての城館跡の存在を連想されるような小字名の存在が見られない現状であった。次に城館跡の構造を述べてみることにする。全体的な規模は、全面発掘をしなければ、その正確なる数値は把握不可能であるが、今まで存在、あるいは検出された城館跡から見た状態から論を展開してみることにする。

推測するに、外郭と内郭の両郭部より構成されていると考えられる。これら両郭部の存在する場所の自然的条件としては、西側に棚沢川が北から南へ流れ、比高数mの段丘崖を形成しており、この河川の両岸には、わずかな氾濫原が開け、水田地帯を成している。

南側には東から西へ流れ、棚沢川に合流する小河水川が発達し、この河によって形造された数mから成る小河岸段丘が連なり、河川の両側には大規模な湿地帯が見られ、大部分水田として利用され、蟹沢地区の一大穀倉地帯と呼ぶにふさわしい景観を呈している。

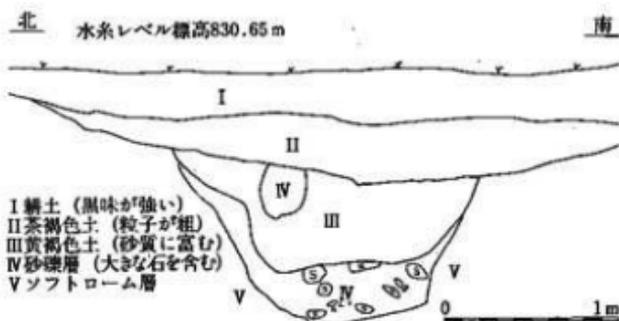
今回の発掘で検出された堀址は検出された位置からみて、外堀と思われる。その広がり範囲は、外郭の東側付近に南北に長く、ほぼ直線状に走っている。堀の南側一帯は今回の土地改良事業実施地区内に含まれていないので、発掘調査は実施できなかった。周囲の地形からみて、この堀の規模は推定五十m位と思われ、南側で、段丘崖下へ抜き出たのであろう。検出された外堀の上面幅は一m三十cm、一m五十cm位を、底面幅二十cm、五十cm位を測る。壁面はや

やなだらかな傾斜を呈し、全体的にはよく手を掛けたように見つけられた。壁面の下部はところどころ若干箱薬研堀りを呈し、粘板岩製の石が土層に食い込んで認められた。流し堀り工法を使用したとみえて、底面のレベルは北から南へわずかながら傾斜をしており、底面自体は割合に固くなっていた。

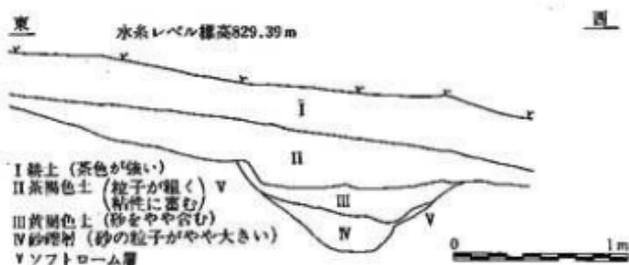
壁面上部から中部にかけてはソフトローム層、下部から底面にかけてはハードローム層によって組成されていた。底面近くより内耳土器片が出土。

南北に長く検出された外堀に対し、ほぼ直角な状態で東西に溝が検出された。この溝の東側は上流の方へ、西側は棚沢川へと流れ込んでいる模様である。壁面は上部から下部にかけて傾斜が強く、下部から底面にかけては直線状を成し、全般的に箱薬研状を呈する。底部は砂礫層が多量に堆積し、堆積状況からして、一時的な堆積と思われる。

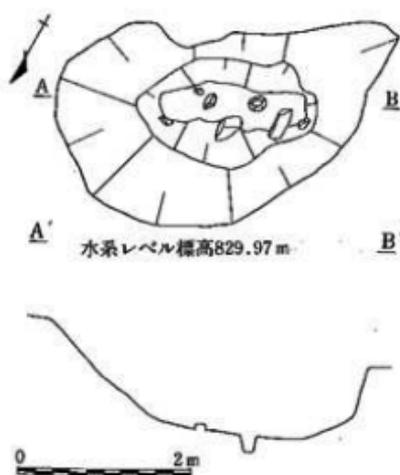
この溝の効用を考えてみると次の場合があげられよう。堀を築くには多くの労働力が必要となる。水を使って堀を掘れば、労働力は少なくてすむ。従って、上流のワランベ地帯から水を取り入れて、西へ流し、外堀、内堀を構築する付近で、せき止めて、水を南北に流したのであろう。ちなみに、本城館の内堀は外堀の西側に存在したとみえて、現在は堀り切り道として使用されている。東西に走る溝の底面近くより十五世紀後半から十六世紀前半にかけての古瀬戸灰種平碗、古瀬戸灰釉小皿が出土し、構築年代の確証性を高めてくれた。



第2図 流し堀址東壁断面図



第3図 堀址南壁断面図



第4図 第1号土壌実測図

(2) 土 壙 (第4図、図版4)

この遺構は南北に延びる堀の中央部付近の東側に検出された。土壙の形態を有している。表土面から三十 cm 位下ったローム層を掘り込み、南北二 m 二十 cm、東西三 m 六十 cm 位を測り、平面プランは不正長円形状を呈している。

壁高は八十 cm から一 m 位あり、比較的高くなっている。東壁は外傾が強く、軟弱であった。西壁はやや垂直気味で堅くなっていた。北壁の内傾の床面近くにローム層に、くい込んで人頭大程の粘板岩が数個、配列されていた。

床面は軟弱で、凹凸が多くあった。縄文中期の打製石斧が二点出土した。従って、本遺構は縄文中期と判明した。

### 三 遺物 (第517図、図版618)

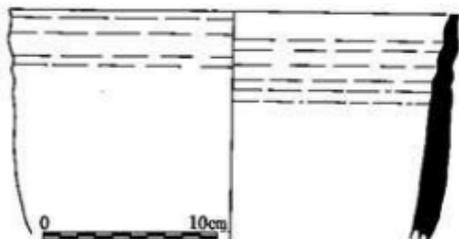
#### (1) 土器 (第516図、図版6)

第5図の土器はグリット内より出土。器厚は5mm位と中厚手に属している。無文地にヘラによる沈線がS字状に明瞭に描出されている。黄褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。縄文後期初頭堀の内1式に属していると思われる。



第5図 土器拓影

第6図の土器は城館跡の南北に走る堀の底面より出土した内耳貫系鍋型土器である。全体の五分の一位残っていたものを図上復元して掲載した破損してしまっている部分に耳があったと思われる。口径は二五、八cmあり、大ききさとしては中位である。現存している器高から察して、

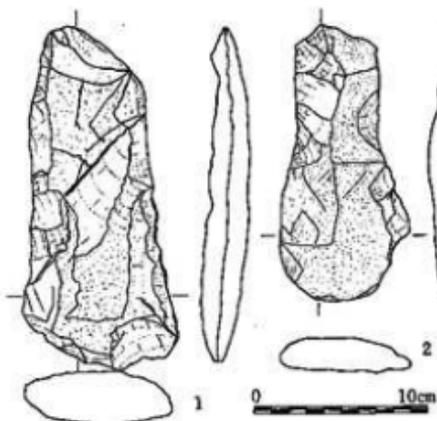


第6図 土器実測図

かなり深くなるものと思われる。内・外面ともに、ロクロ痕が顕著である。室町後期から戦国期のものと想定される。

#### (2) 石器 (第7図、図版7)

第7図(1・2)の石器はともに第一号土壇の床面近くから出土した。(1・2)はともに下端がわずかに開く撥形状の打製石斧であり、利維調整は見事である。(1)は変成岩製、(2)は硬砂岩である。双方とも縄文中期の代表的な打製石斧である。



第7図 石器実測図

#### (3) 陶磁器 (図版8)

今回出土した陶磁器はここに掲載した五点であり、名称、時期、備考を記す。1は古瀬戸灰釉平碗 十五世紀後半 容察終末。2は古瀬戸灰釉小皿 十六世紀前半 大塚I期。3は鉄釉壺状容器 十八世紀代 産地は不明。4は鉄釉落し蓋 十七世紀前半 産地不明 5は古瀬戸鉄釉椀皿 十六世紀前半 大塚II期。

#### 四 まとめ

今回の調査で見えられた遺構は城館跡の堀、土壇一基であった。城館跡の時代は前述したように出土陶磁器片からみて、室町終末期から戦国時代と思われる。付近に入垣外と言う小字名がある。富県埋橋文書の中に入り城主野口氏という記載がみられ、この入という一字は何か関連があるのだろうか。遺跡発掘地から一山越えれば高遠町藤沢谷であり、ここには名族藤沢氏が盛隆しており、藤沢氏が天竜川沿岸地帯へ進出するためのルート筋ではなかつたのだろうか、このルート筋の前衛の拠点地区としてこの城館跡を設置したのではないだろうか。

前述した埋橋文書の内容を記すと次のようになる。織田氏の高遠城攻略、武田氏の滅亡、ついで織田氏の滅亡と時代は急激に大きな変動を展開していった中で、高遠から藤沢谷に勢力を誇っていた保科正直の身の振り方に注目すべき点が多かった。

天正十年(一五八二)八月廿一日、保科正直は弟の内藤昌月と連署で、埋橋彦助に埋橋・福地、入子等の地において二二貫文の地を宛行っている。保科氏系統は名族、藤沢氏の分派ともいわれている。説もある。

一方、手良地区に於いては戦国時代に勢力を持っていた向山一族も考慮に入れてみなければならぬ。向山一族を代表するのに向山出雲があり、現存する向山姓の先祖だと伝承されている。この向山出雲守の系統を「甲陽軍鑑」によって記すと次のようになる。

#### 品第卅二 (中略)

一、永禄五年壬戌六月吉日に、太郎義信公へ信玄公より、飯富兵部殿・跡部大炊助・長坂長閑<sup>②</sup>三人を御使になされ、四郎勝頼(公)を諏訪の頼茂跡日と号し、信州伊奈の郡代になされ、たかとうに置申べきとあれば、義信公尤と被仰付、四郎勝頼公、たかとう城代也。勝頼公に付らる、衆、

一、跡部右衛門 一、向山出雲 一、小田桐孫右衛門

#### (下略)

中世土豪の勢力範囲からみて、向山氏が野口蟹沢地区にまで勢力範囲を広げていたかは大きな疑問がある点からして、前述したように、入林遺跡の中世城館跡は藤沢氏配下のものの可能性が強いように思われる。出土陶磁器の鑑定は愛知県立陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏、同館学芸員、井上喜久男氏、仲野泰裕氏に依頼した。

(飯塚政美)



図版1 遺跡地を東側から眺む



図版2 堀 址 全 景 (北側より)



図版3 堀 址 全 景 (南側より)



図版4 第 1 号 土 壙



图版5 发掘风景



图版6 出土土器



图版7 出土石器



1



2



3



4



5

圖版 8 出土陶磁器

# ワランベ遺跡

## 一 発掘日誌

昭和六十年十一月二十九日(金) 晴 ワランベ遺跡へ入る。グリット掘りを実施する。耕土は浅いところで10cm位、深いところで30cm位と割合に浅かった。長竿をつくったとみえて、土層の攪乱が顕著であった。黒曜石片がわずかに出土した。

昭和六十年十二月、昭和六十一年一月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編纂

昭和六十一年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十一年三月 報告書を刊行する。

## 二 遺構

今回の発掘調査では遺構の検出は何もなかった。おそらく、遺構は今回、土地改良を実施する地区外に存在するものと思われる。

## 三 遺物

今回の発掘調査で検出された遺物はわずかに黒曜石一片と言ふみじめな状態であった。遺構同様、今回、土地改良を実施する地区外に埋蔵されているものと推定できよう。

## 四 まとめ

今回の発掘調査は土地改良に伴なう小規模排水特別対策事業で、事業地区内はすでに大部分以前に土地改良によって造成された事実

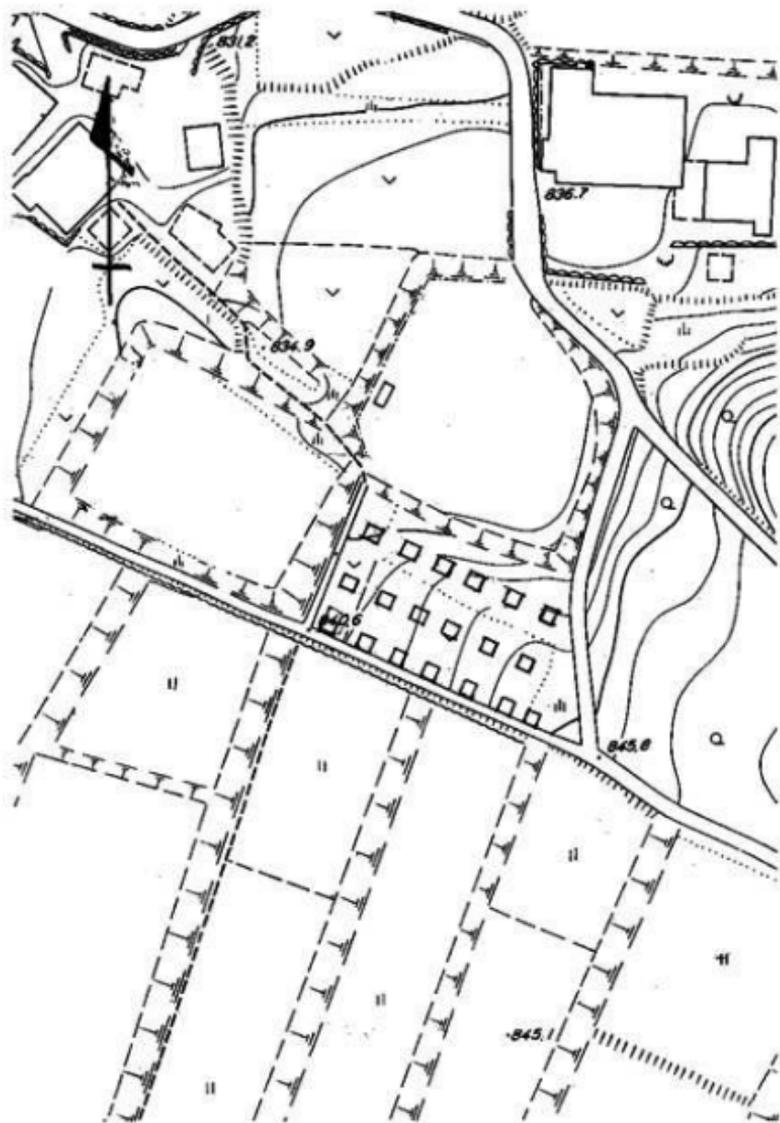
が現存している水田の区画及び面積から断定できる。

実際に発掘調査を実施してみると、山麓からの押し出しの状況(地表直下に多量の砂礫層が含まれていた)、また、過去の水田造成の折に、遺構の存在しそうな土層は破壊されてしまっていた。

二つの容態からみて、今回、調査を実施した付近には遺構の存在可能性は皆無に近い状態と断定しても一向にかまわないと想像できると思われる。

もう少し、山麓線上に該当する場所、あるいは土地改良を実施していない地域にはその数ははつきりと把握できないが、遺構は存在するものと思われる。

最後に、手良土地改良事務所、地元土地改良役員一同、伊那市教育委員会一同、調査団の諸先生、作業員の皆様一同に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。  
(飯塚政美)



第1図 地形及びグリッド配置図 (1:1,000)



図版1 遺跡地の近景及び発掘終了後のグリット



図版2 発掘風景

